N. ルーマンのメディア論について

春　日　淳　一

1. はじめに
2. ルーマン社会理論におけるメディアの位置
3. メディアの分化および典型的メディアとしての
　真理・愛・貨幣・権力
4. パターン変数図式とルーマン図式
5. メディア発達の諸条件
6. おわりに

1. はじめに

人間や集団の相互行為（Interaction）を対象とする学問すなわち，人類学・社会学・政治学・経済学等々にとって，人々の間のコミュニケーションを媒介するメディア（媒体）の研究は重要な役割をになうものと考えられる。経済学を例にとれば，貨幣メディアは市場システム存立の前提概念として中心的な位置を占めており，メディアの特殊理論ともいうべき貨幣論や金融論がすでに発達している。これを受けてT.パーソンズは貨幣と言語的コミュニケーションのアナロジーを起点とする「一般化されたシンボリック・メディア」の議論を展開した[1)]。彼の議論にたいしては，貨幣を例証にとることで説得力をもちえた反面，メディアの一般理論を特殊メディアである貨幣の「現実」に強く引き寄せる結果にもなったという指摘がなされよう。とはいえパーソンズのメディア論の批判が本稿の課題なのではない。ここでは，貨幣から出発するパーソンズ流の接近法が一定の成果をあげる可能性は留保したうえで，視角を異にする

1）Parsons〔9〕, chap. 14-16, Parsons〔10〕.

もうひとつのアプローチに注目してみたい。それは，パーソンズの構造一機能理論にたいして独自の機能一構造理論の立場からパーソンズ・メディア論の一般化を意図しつつ展開されたN. ルーマン (Niklas Luhmann) のメディア論である。

ルーマンは，構造一機能理論が一定の構造をもつ社会システムを前提としてそのシステムの維持に必要な機能的遂行を問うのにたいし，構造を特定化することなく，一般的にシステム構造の機能を複雑性[2]の縮減 (Reduktion von Komplexität) ととらえる。この意味でルーマンは自己の社会理論を機能一構造理論と呼んでいるが，構造一機能理論に対比すべきその大きな特徴は次の二点にある[3]。(1) 機能分析の究極の準拠点として，予め構造化されたシステムをとるのではなく，それ自身システム構造を示さない「世界」なるものを選ぶ。世界は内・外を区切る境界を，従って環境をもたず，その存在がおびやかされることはなく，そこでは「複雑性」だけが問題になる。(2) 社会学の基礎概念として「社会的行為」ではなく，「意味」(Sinn) ないし「意味ある体験加工」(sinnhafte Erlebnisverarbeitung)[4] をとる。ここで意味とは複雑性の縮減と維持の機能をになうものとされ，複雑性縮減の帰属先がシステムか環境かによって，意味ないし意味ある体験加工は機能的に等価な「行為」と「体験」に区分される。この二点にかんしてはともに，ルーマンの自負にもかかわらず，準拠点や基礎概念は見かけほど異なっていないという批判があるが[5]，ここでは理論

2）複雑性は「可能な出来事の全体」(Luhmann〔1〕, S. 115) あるいは「そこから選択 (Selektion) が行なわれる可能性の数」(Luhmann〔2〕, S. 222) と定義される。

3）以下の整理は R. Münch〔6〕, S. 149-159 による。

4）「意味ある体験加工」というのは，人間の環境にたいする関係のうち，(本能や生理学的反射にではなく) シンボル化にもとづくものを指している。

5）R. Münch〔6〕における批判を要約すれば次のようになる。まず，「世界」はその存続が問題にならないのであるから，複雑性縮減という機能がみたされるべき準拠点とはなりえない。「社会システムは複雑性の把握と縮減の機能を有している。それは，最も外側の世界の複雑性と，非常に小さい，人間学的理由からほとんど変更できない人間の意識的体験加工能力の間を媒介する」(Luhmann〔1〕, S. 116) というルー

枠組の比較検討に立ち入ることはやめ，ルーマンのメディア論それ自体に焦点をあててその紹介と若干のコメントを行なってみよう。

2. ルーマン社会理論におけるメディアの位置[6)]

ルーマンは，社会理論に時間的，物的（sachlich），社会的の三局面を考え，それぞれに対応して進化，システム分化，人間の諸関係（コミュニケーション）にかんする命題が定式化されるとする。このうち，進化とシステム分化にかんする仮定は19世紀以来の社会理論の二大基礎をなしてきたものであり，スペンサーの進化論的社会有機体説やデュルケームの社会分業論に典型的なあらわれをみることができ，その影響はマリノフスキーらの機能主義理論へと流れ込んでいる。これにたいしてルーマンは人間のコミュニケーションを他の二つと同列な第三の基礎としてとりあげる。そのさい，コミュニケーションないしコミュニケーション・メディアは進化の文脈で論じられることに注意すべきである。すなわち，生物体の進化における(1)突然変異，(2)有用なものの生き残り，および(3)生殖による隔離というメカニズムに例示されるように，一般にシステムの進化のためには(1)可能性の過剰を生み出す変異（variation），(2)有用な可能性の選択（selection），(3)選択された可能性の維持と安定化（stabilization）の三つのメカニズムがともにはたらく必要がある（Luhmann〔3〕, 訳 p. 156, 162）。社会システムのばあいにこれらのメカニズムとして主に機能するものはそれぞれ言語，メディア，システムであるとルーマンはいう（Luhmann〔5〕, p. 152）。

マンの言表からも推測できるように，彼は暗に個人(das menschliche Individuum)を準拠点にしているのだ。一方，「意味」についていえば，人間の行為がシンボルないし意味に制御されるものである限り，意味の機能を問うことは行為の一属性の機能を問うことにほかならず，そこから行為に代えて意味を基礎概念にすべきだという主張は必ずしも生まれない。むしろ意味をとりあげても結局行為を対象にせざるをえないという確信が深まるのである。(Münch〔6〕, S. 149-159)

6）以下のルーマン・メディア論の紹介は概ね Luhmann〔4〕に沿っているが，彼の他の論文等を随時参照しつつ筆者なりの整理ないし解釈を加えたものである。

このことは，「変異」を「複雑性の増大」と言い換えればわかりやすくなる。言語が文字化されると，コミュニケーションは現に居合わせている，従って知覚可能な人々の間だけでなく，そこに居ない者や未知の者をも含めた範囲に拡大され，それだけ社会の複雑性が増大する[7]。かかる複雑性の処理つまり縮減のためには機能的システムの形成と分化が必要であり，その前提条件が，縮減された複雑性を有効に伝達するメディアの存在とその分化なのである。こうして社会理論の三つの局面は進化の文脈で統合されることになる。これを図式的に示せば図1の如くなるであろう。

ここでパーソンズのメディア論を思い出してみよう。彼のばあいには，機能的システム分化が先にあり，そこから下位システム間の相互交換の必要が生じ，しかも分化の進行につれバーター的相互交換に代って「シンボリックに一般化された交換メディア」による二重の相互交換が成立すると考えた。ルーマンのばあいは，予め分析的な機能分化図式を措定するのでなく，メディア分化を前提としてシステム分化が生じるとみている点でパーソンズとは異なる。

図　1

			進化の3メカニズム		
			時間的	社会的	物的
社会理論の3局面	時間的	進化	変異（言語）	選択（メディア）	安定化（システム）
	社会的	コミュニケーション			
	物的	システム分化			

7）言語は進化の過程における複雑性増大のいわば始動メカニズムとして機能するが，増大した複雑性に対処すべく生じる社会の機能的分化それ自体も複雑性を高めることに注意しよう。すなわち，「あらゆる部分システムは，それぞれの特殊な機能に限定されることによって抽象的な視座を獲得し，そのなかで，機能的に不特定なシステムの場合と比べてより多くの可能性をつくり出すことができるのである。」(Luhmann〔3〕, 訳 p. 157)

しかし，ルーマンのめざすところはパーソンズ・メディア論の内在的批判ではなく，その一般化にある。一般化の主要な点は次の二つである。(1) 互酬性が問題になる下位システム間の相互依存とそれを媒介する交換メディアというとらえ方（パーソンズ）から，システムの状態選択（複雑性縮減）の効果的伝達とそれを媒介するコミュニケーション・メディアへの問題の拡張。(2) メディアのコードを社会的に統合され予め了解された価値そのもの（パーソンズは貨幣に効用，権力に有効性，影響力に連帯性，そして価値コミットメントに統合性という価値尺度をあてている）としてではなく，持つ・持たざる，真・偽，正・不正，美・醜といった価値一無価値の二元的対立としてとらえる二元的コード化ないし図式化。

この一般化と前述の進化の視点をふまえたうえで，以下メディアの分化，メディア特有のシステムの分化といった問題が論じられていく。

3. メディアの分化および典型的メディアとしての真理・愛・貨幣・権力

ルーマンによれば，文字のない先史社会では言語は可能性を限定するものとして機能し，そこでは言語とメディアの機能が溶け合っていたという（Luhmann〔5〕, pp. 512-513)。しかるに文字の発明はコミュニケーション範囲の拡大を通して，言語に他の可能性への接近を開く，つまり複雑性増大の機能をもたせることになり，ここに言語とは別に選択を伝達する役割をになったメディアが分化してくる契機を見いだしうる。

機能的システム分化からメディアの分化を導き出すパーソンズにとって，メディアは四つに限定されていた。これにたいしてルーマンは，メディア-コードの分化に異なった方向づけを与える四つの基本状況（Grundkonstellation）を類型化し，それぞれの状況の中で代表的ないし典型的メディアを取りあげて論じていく。従って，同一基本状況においても扱われる特殊問題によって違ったメディア-コードが発達する可能性が考えられているわけであり，パーソンズ

のように経験的一般化の助けを借りて四メディアを固定するというやり方はとられない。基本状況の類別は選択伝達の様式にもとづいて，選択（＝複雑性縮減）の責任がシステムに帰せられる（行為）か環境に帰せられる（体験）か，および選択主体がメディアの送り手（他者）か受け手（自我）かの二軸で行なわれ，各状況における典型的メディアと合わせて図2にまとめられる。このうち左下の欄の所有権/貨幣と芸術は，特殊問題ごとに異なったメディアが発達する例を与えている。この欄は，他者が選択的に行為し，自我はその選択を単に体験するという状況を示しているが，他者の行為が稀少な財の占有という形をとるばあいには所有権/貨幣メディアが，同じく他者の行為がその選択性の追体験を強要する対象（作品）の任意制作という形をとるばあいには芸術メディアが，それぞれ発達するのである。

図　2

	自我の体験	自我の行為
他者の体験	真　理	愛
他者の行為	所有権/貨幣 芸　術	権力/法

次に，準拠システムを自我と他者のダイアド（dyad：二人から成る関係）にとって，基本状況と真理・愛・貨幣・権力の四つの典型的メディアとの結びつきをみておこう。

(1) 真理：他者が，自我との関係の外（システムとしてのダイアドの環境）で学習（選択）したものを自我に伝え自我が受け入れる（選択を体験する）ように働きかけるメディアのひとつが真理である。真理メディアの特徴は，それが体験選択の伝達可能性の問題をコミュニケーション参加者の道徳的・社会階層的資格，とりわけその人の誠実さや威信から独立させるところにある。この独立性は真理メディアのシンボリックな一般化[8]と，真・偽の二元的コード化によっ

8）一般化にもやはり時間的・物的・社会的の三次元が考えられており，時間的次元ではメディアが時差を超えて流通すること，物的次元ではメディアがその用いられる具体

て強化され，真理をコミュニケーション・メディアとする科学システムの分化と発展を促すことになる。

(2) 愛：他者が，自我とのダイアド関係の外で自我を選択（体験）しているとき，自我がこの選択を受け入れ自我自身も他者を選択（行為）するように働きかけるメディアのひとつが愛である。ギリシャ・ローマ時代には，愛にあたる言葉は *philia* ないし *amicitia* であり，この言葉には政治（正義）・経済（有用な好意）・宗教（神の愛）的意味が分ちがたく結びついていた。今日のような意味での愛というメディアが問題となり分化してきたのは，中世以来とくに高い階層において生活方式の個人化が進んでからのことであった。このメディアの発達は，汝・汝以外の者という二元的コード化をもって婚姻を基礎づけ，今日の形での家族システムの分化をもたらすとともに，世界を公共的な匿名的に構成された生活世界と，特異的に構成された私世界に二重化した。

(3) 所有権/貨幣：他者が自我とのダイアドにおいて稀少な財を占有するさい，その選択（行為）を自我が受け入れ我慢する（選択を体験する）ように働きかけるメディアが所有権/貨幣である。このうち所有権は占有を静態的に正当化する法形態であり，貨幣は占有を動態的に正当化する流通形態である。貨幣メディアのシンボリックな一般化は，時間次元において，いつでも処分しうる可能性（流動性・価値保蔵性）として，物的次元においては貨幣で購入する物やサービスの固有の属性からの中立化（価値尺度化）として，そして社会的次元では交換相手からの中立化（一般的交換手段化）として表現される（Luhmann〔2〕, S. 214-215)。この一般化と，持つ・持たざるの二元的コード化に条件づけられて経済システムの分化・発展が可能になる。

複雑性の縮減という観点からみると，貨幣メディアは，各人の縮減を他者への複雑性の転移によって可能にするという他のメディアにない特徴をもっている（Luhmann〔2〕, S. 213-214)。すなわち，当該交換において貨幣を持つ者は，

的文脈にたいして中立的であること，そして社会的次元ではメディアが相互行為の相手の如何にかかわらず用いられうることが一般化の条件である。

ひとつの欲求の具体的固定と充足によって自分自身にかんする複雑性を縮減し，同時に貨幣に象徴される選択の自由を放棄し，それを貨幣を持たざる者に譲渡する。つまり貨幣を受け取った者に複雑性＝選択の自由が伝達される。従って，経済システム全体としては絶えず縮減が行なわれているにもかかわらず，選択の可能性という意味での複雑性は保存されるわけである。

(4) 権力/法：他者は，自我がいかに行為すべきかを決定（これは他者の選択行為である）し，自我の避けたがる代替案，たとえば物理的力の行使とか有利な雇用関係からの解雇を背景に自我にその行為を選択させる。このばあいに働くメディアが権力であり，その二元的コード化は他者が自我に求めている行為か，他者が示す避けるべき代替案かという形をとる。権力メディアがシンボリックに一般化され，正・不正（合法・不法）の二元図式でコード化（さきのコード化にたいして第二コード化（Zweit-Codierung）と呼ばれる）されたものが法[9]であり，政治システムの分化はこうした権力/法メディアの分化を前提にしている。

ルーマンはこのほかに信仰や芸術といったメディアないしメディア候補の名をあげているが，それらについて立ち入った考察はせず，むしろ個々のメディアに発達程度の違いをもたらす要因が何であるかを問題にする。しかしここではその問題に進む前に，節を改めてルーマンのメディア分化図式とパーソンズのパターン変数図式の間にみられる対応関係について少しふれてみたい。

4.　パターン変数図式とルーマン図式

パーソンズは行為にさいしての客体類別と客体への態度（指向）の二分法的パターンないしディレンマをパターン変数図式として定式化した[10]。それによ

9）ルーマンは法を「整合的に一般化された規範的行動予期」（Luhmann〔3〕，訳 p. 112）と定義するが，この行動予期の時間・物・社会の三次元での一般化を支えるものは，物理的力のもつシステム構造からの独立性，普遍的利用可能性である。（Luhmann〔3〕，訳 pp. 121-131）

10）パターン変数についての要約的記述は Parsons and Smelser〔8〕，訳 I pp. 53-61

ると客体類別は普遍主義—個別主義 (universalism vs. particularism)，遂行—資質 (performance vs. quality) の二つの軸で行なわれる。前者は客体を普遍的な規準にもとづいて扱うか，主体との特定の関係にもとづいて扱うかの区別であり，後者は客体をその業績でみるか属性でみるかの区別である。医師を例にとると，患者をコネの有無にかかわりなく公平にみるか，コネのある者を優先的にみるかは普遍主義—個別主義の軸に，また診察時の患者の症状や告知に注目するか，患者の体質や性格に注目するかは遂行—資質の軸に，それぞれ対応しているといえよう。一方，客体への態度は限定性—無限定性 (specificity vs. diffuseness)，感情性—感情中立性 (affectivity vs. affective neutrality) の二軸で類別される。前者は客体の限られた側面にだけ関心を寄せるか，多面的な関心を寄せるかの区別であり，後者は客体にたいして情動的な態度をとるかとらないかの区別である。ふたたび医師を例にとると，患者の診療に専念するか，患者である人間との個人的な用件をあいだにはさむかは限定性—無限定性の軸に，また患者についての個人的な好き嫌いを診療行為のさい表現するか否かは感情性—感情中立性の軸に対応しているといえよう。

客体類別と客体への態度をパターン化した上の四組の変数は，主体からみた客体とのコミュニケーションのあり方を規定する変数と理解することができる。そこでこのコミュニケーションをルーマン流に複雑性縮減（＝選択）の伝達ととらえるなら，パターン変数と複雑性縮減の様式には次のような対応が存在するように思われる。まず態度の変数の限定性—無限定性からみていくと，上の例でさしあたり職業倫理をはなれて医師が患者の診療に専念するのはどのようなばあいであろうか。通常考えられるのはその患者が医師の私生活領域でもなじみのないいわば未知の者のばあいである。このとき，患者は医師との相

にみられる。なお，ここでは自己指向—集合体指向 (self-orientation vs. collectivity-orientation) という変数の対（ペア）は除外する。なぜならこの対（ペア）は集合体とその成員の関係を規定するものであり，成員間の相互行為ないしコミュニケーションの様式には直接のかかわりをもたないからである (Parsons *et al.* 〔7〕, pp. 52–53, Parsons and Smelser 〔8〕, 訳 I p. 58)。

互行為システムにはいることによってはじめて医師にたいして自らの複雑性を縮減しうる。そのさい，縮減は自分をその医師の診療を求めている患者と限定するところから開始される。従って，医師としてはとりあえず診療に専念するほかはないわけである。一方，診療のあいだに個人的な用件をはさむというのは，患者を既に知っているばあいに起こりうる。このとき医師にとって患者の複雑性は当該相互行為システムの外（環境）で予め縮減されている。ちなみに，患者が親しい人間であっても診療以外の用件をはさむべきでないという医師の職業倫理は，「診療に必要なばあいを除き，患者の複雑性をシステム外で予め縮減されたものとみなしてはならない」と翻訳できるであろう。

次に感情性―感情中立性の対（ペア）をみよう。医師が患者について好き嫌いを感ずるのは，患者が当該相互行為システムの内か外で自らの複雑性を縮減し，自分がどんな人間であるかを程度の差はあれ医師に知らせた結果である。医師が患者のこの複雑性縮減（従ってまた患者にたいする好き嫌いの感情）を事実として受け止めるだけで行為には表わさないなら，医師にとってこの選択は「体験」である。もし好き嫌いの感情を診療のさい何らかの形で表現するなら，この選択は医師の「行為」とみなされる。

客体類別のパターン変数についていえば，医師が客体である人間を普遍的に定義された患者のひとりとみなすことは，その定義による客体の複雑性縮減をそのまま受け入れることであり，医師にとっての「体験」である。一方，コネのある特別の患者とみるばあいには，そのコネの意味は医師によって解釈されたものであり，医師の能動的な複雑性縮減すなわち「行為」を伴っている。

最後に遂行―資質の軸では，診察時の患者の症状や告知は患者が当該相互行為システム内で行なう複雑性縮減であり，患者の体質や性格は当該システムの外（環境）ですでに縮減された複雑性であるといえよう。

パターン変数と複雑性縮減様式の以上の対応を図2と位置関係を揃えて示せば図3のようになる。

ここで示した普遍主義―感情中立性，個別主義―感情性，資質―無限定性，

図　3

			主体が行なう複雑性縮減	
			体　験	行　為
			普遍主義—感情中立性	個別主義—感情性
客体が行なう複雑性縮減	体験（システム外）	資質—無限定性	(L)	(I)
	行為（システム内）	遂行—限定性	(A)	(G)

(A, G, I, L は Parsons *et al.*〔7〕における対応を示す)

遂行—限定性という組み合わせは，固有の親和性をもつものとしてパーソンズによってもとりあげられ，図に記入したように A・G・I・L 各機能との対応がつけられている[11]。ただパーソンズの対応づけはパターン変数の組から A・G・I・L を導き出すのではなく，はじめに措定された四つの機能問題をパターン変数に結びつけるというやり方であるから，かりに図3のパターン変数と複雑性縮減様式の対応を認めるとしても，AGIL 図式とルーマンのコミュニケーション図式が相同になるわけではなく，A・G・I・L はむしろルーマン図式中のメディア例（これはもちろん四つに限られない）にあたる典型的機能例とみるべきであろう。とはいえ，すでに述べたところからパターン変数図式がパーソンズ理論とルーマン理論の結び目に位置していることは十分予想できるにちがいない。この点を精確に見きわめるには，パターン変数図式とルーマン図式の対応をより確実なものとし，またパターン変数理論自体に含まれる混乱

11) Parsons *et al.*〔7〕, pp. 179-187.

を解きほぐさねばならないが，それらは本稿の主旨からやや外れるので別の機会に譲ることにしよう。

5.　メディア発達の諸条件

ふたたびルーマン・メディア論に戻って，メディアの発達にかんする彼の議論をみてみよう。ルーマンはメディアの発達程度や，他のメディアとの相対的優位を決める要因として大きく四つの変数をあげる。すなわち，〔1〕メディア特有の下位システムの分化可能性，〔2〕環境システムとの両立性，〔3〕メディア特有のコミュニケーション・プロセスにおける能率向上の可能性，〔4〕適切なシンボル化の利用可能性と制度化可能性である。

〔1〕第一の要因について彼は，下位システムの形成が容易か否かは帰属様式の行為近接性，社会的な機能領域の相互行為近接性，伝達成果が確認できる時間的視界などに関連しているのではないかと推定する。たとえば政治システムの分化が進化的にみて早く起こり，科学システムの分化が遅いことはひとつの状況証拠と考えられる[12)]。このうえは単なる推定を超えて，こうした関連性の詳細な検討が必要であろう。

〔2〕次に，メディア特有の下位システムをひとつとると，その環境としては他の下位システム，他の社会システム，そして社会システムの環境である有機体的人間（パーソンズの行動有機体）と心的システム（パーソンズのパーソナリティ体系）がある。メディアないしメディア特有の下位システムにとって，これら環境システムは選択伝達を妨害あるいは促進するものとして立ち現われる。そのためあらゆるメディアは，メディアとそれぞれの環境システムとの両立性を保障するメカニズムをつくり出す。

有機体との関係におけるかかるメカニズムは共生的メカニズム(symbiotische

12）政治システムではメディア（権力）の送り手・受け手双方で選択性が当該システムに帰属し，科学システムではメディア（真理）の送り手・受け手双方で選択性が環境に帰属するから，政治システムの方が行為近接性が高いといえる。

Mechanismen）と呼ばれ，真理には知覚，愛には性，所有権/貨幣には欲求充足，権力/法には物理的力というように各メディアにひとつずつ特定される。これらの有機体的プロセス（知覚・性・欲求充足・物理的力等々）は，限界状況においてそれぞれのメディアの機能を代行するという保証を与えることによって，各メディアのもつ機能不全の危険をカバーしているのである[13)]。

心的システムにかんしていえば，コミュニケーション・メディアの存続と発達は，選択動因がパーソナリティ・システムの内だけで短絡的に形成されるのでなく，社会的コミュニケーションを迂回してつくられるという点にかかっている。この動因形成の迂回性を支持するメカニズムは「自己満足の禁止」であり，高度に発達したメディア-コードでは常にこの機能をもつシンボルが見いだされる。具体的には，暴力による目標追求と法貫徹を禁止すること（権力/法メディア）；愛と性の問題におけるあらゆる自己満足から信用を剝奪すること（愛メディア）；経済的禁欲と自足の価値を低め，不利にすること（所有権/貨幣メディア）；純粋に主観的な明証，内省で得られた確信，直接的な知識源，これらを方法論上すべてとり除くこと（真理メディア）がそれである。

システムの境界を越えたコミュニケーションが行なわれるばあいには，他の下位システムや他の社会システムとの関係が問題になる。ここで両立性を保障するメカニズムは，構造面で「他の領域における変動からの中立」（たとえば法律上の保護は景気や租税収入に直接左右されるべきではなく，また愛は政治的あるいは経済的破局ゆえに終わるべきではない）と，「他のメディア領域を流動的資源の観点で扱う能力」の二つであり，過程面では「（資源としての）個々のメディアの他のメディアへの変換禁止」（たとえば権力も貨幣も愛も，真実証明の文脈で用いてはならない）である。現実には，学問上のテーマ選択に政治的，経済的観点がはいり込んだり，配偶者選びに経済的観点がはいり込むというように，メディア間

13）実質価値による貨幣の保証は，有機体的プロセスによる危険カバーを制度化したものと考えられる。なぜなら，実質価値はいつでも欲求充足のために使用可能だからである。Luhmann〔2〕, S. 218 参照。

につながりや影響可能性が存在する。しかし，メディアの分化にとって決定的に重要なのは，こうしたメディア間の結びつきが他のメディアの二元的構造にまで手出しをしてはならない，つまり真・偽，正・不正等々にかんする決定に当該メディア以外のメディアがかかわってはならないということである。

〔3〕第三の要因にかんしてはまず，メディアの再帰化（Reflexivwerden）がとりあげられる。実際的目標を達成する前に自分自身に適用されるプロセスを再帰的であるというが，高度な複雑性を有する近代社会では，社会をささえる主要なメカニズムのおそらくすべてが不可避的に再帰的となり，それはメディア分化を強化する作用をもつ。具体的には次のような例がある。法の実定性（Positivität）は規範定立の規範化に[14]，民主主義的政治形態は権力者に権力を及ぼす可能性に，それぞれ基づいている。また愛を愛することはジャン-パウル（Jean Paul, 1763-1825）以来，個人的関係の最高の形態とされてきたし[15]，決定にかんする決定は官僚制の原則である。さらに科学システムの計画は研究についての研究（方法論）に基づかねばならない。貨幣にかんしていえば，それはまず交換プロセスの再帰化，すなわち交換可能性の交換を可能にし，次いで利付信用の発生とともに，貨幣が貨幣を生む，ないし貨幣に貨幣を払うという貨幣メカニズム自体の再帰化をもたらした（Luhmann〔2〕, S. 216)。

このような再帰化にはしかし，ひとつの重要な問題がつきまとう。すなわち，再帰的なプロセスを通じて保持されるべき同一性がどこに存するのかという問題である。ルーマンはこの問題に直接解答を与えているわけではない。ただ，実定法の基礎に自然法と呼ばれる道徳的規範を考える如く，何らかの不変のものあるいは絶対的な価値を求める立場（完全思考）は，複雑性に乏しいそれゆえ再帰化を必要としない時代の秩序観念にたよるものであり，疑問であるという（Luhmann〔3〕, 訳 p. 236)。

14）憲法は規範化を規範化する規範の一例である。なお法の実定性にかんしては，Luhmann〔3〕, 訳 pp. 229-240 参照。

15）この点にかんしては，Luhmann〔3〕, 訳 p. 247 註(1)参照。

再帰化に加えてコミュニケーション・プロセスの能率に影響すると考えられるもうひとつの要因がある。それは選択的活動（アクト），つまり体験や行為が連続して行なわれていくばあい（選択連鎖）の，前の選択のあとの選択（接続選択）にたいするかかわり具合ないし責任関係である。たとえば貨幣メディアでは支払人は受取人がその貨幣で何をするかに，つまり接続選択に何ら責任を負う必要がないのにたいし，真理メディアでは反証の受け入れという形で，権力メディアでは階層的な構造において，それぞれ接続選択の結果にたいして先行する選択者が責任を負う[16]。このことは，コミュニケーション・プロセスにおいて貨幣メディアに他のメディアよりも高い能率を保証する。

さらに，メディア-コードの要求を意識容量に合わせるための要件がどの程度満たされているかということも，コミュニケーション・プロセスの能率にかかわってくる。その要件とは，どのコードでコミュニケーションが行なわれているのかをすぐにわからせるコード識別規則の存在をはじめ，状況の単純化，非常に高度な複雑性下での情報処理などであり，またコード規則の要求水準を下げる「暗黙の了解」というメタ・コミュニケーションもひとつの役割を演ずるであろう。

最後に，メディアの機能欠陥にさいして用いられる副次コード(Neben-Code)についてふれておこう。副次コードの顕著な例は，科学システムにおける真理の代用物としての名声，政治システムにおける部下の上役にたいする，また大臣の所属党派にたいする，対向的かつインフォーマルな権力，そして貨幣システムが機能しないばあいのたとえばタバコ通貨である。愛の関係もそれが危うくなると，自己の歴史（かつての愛情関係ないしかつての彼または彼女）を副次コードとして利用する傾向がある。副次コードは具体性や文脈従属性が主コードに比べて大きいかわりに，技術性（Technizität）や社会的な正当化能力がより小さいという特性をもっているが，ひとつのメディア領域の内部で副次コード

16）愛は二人のパートナー間のメディアであるため，選択連鎖の問題は再帰化の問題にほぼ帰着する。

が利用できるということは，別種のメディアによる機能欠陥の補塡を防ぎ，メディアシステムの自律性とその機能的分化の維持に役立つ。

〔4〕一般化されたコミュニケーション・メディアの進化はメディア-コードの一般的なシンボリックな表示の可能性にも依存している。このシンボル化を制約しうるものとしてルーマンはさしあたり三つの情況に着目する。

a）あらゆるメディアは，他のやり方も可能であるのになぜ特定のやり方で体験され行為されるのかを説明し納得させる「偶有性公式」(Kontingenzformel) の機能をみたさねばならない。これはメディア-コードのレベルでは，選択それ自体を根拠づけることによってではなく，特定化されていない偶有性を特定化されたあるいはしうる偶有性に縮減することによって行なわれるしかない。問題はこういった偶有性公式ないし偶有性の縮減が，今日なお究極においては宗教的・道徳的な基礎に頼っているという現実である。この現実はシンボル化にどのような影響を与えているのであろうか。

b）上述の点は再帰化のところでふれた完全思考とも関連してくる。完全思考は否定不可能なものの存在を認める立場にほかならない。ヨーロッパの古典的メディア-コードはこの完全思考に対応して完全観念（たとえば神の愛）によってシンボル化されていた。ところが反省（Reflexion）や進化といったプロセス概念をつくりあげた市民社会においては，否定そのものだけが否定不可能なものとして残される。この転換はシンボル化にどのような変化をもたらすであろうか。

c）メディア-コードのシンボルは，その承認と遵守がお互いどうしの人間的尊敬の前提にされているばあいには常にそうであるが，道徳的性質をもちうる。この点もまた，先の二点とかかわりあいながらシンボル化を何らかの形で制約していると考えられる。

以上第四の要因にかんしては，明らかに社会学の射程を超える問題が含まれており，にわかに結論的言明を引き出せるという性質のものではない。

6. おわりに

本稿ではルーマン・メディア論の概要を筆者の理解した形で紹介することに重点をおいてきた。ルーマンはさらに，現代社会の動機づけ危機（Motivationskrise）[17] の問題に彼のメディア論でもって接近しうることを示唆しているので，この点の吟味を含め，今や理論の評価・批判に移るべき段階であろう。しかし，そのためにはルーマンの社会理論ないし社会システム論の全体について基礎概念や論理構造を明確にとらえておく必要があると思われる[18]。筆者の準備状況にてらして，これらは稿を改めて行なうこととしたい。ただ，危険をおかしてあえて一言するなら，機能を複雑性縮減という形式でおさえるルーマンの新しいアプローチには，経済・政治等々の実体的機能との結び目がなく，いわば発生論を欠くメディア論になっている点で，理論の照射領域の広さにもかかわらず不満が残るのである。第4節で示唆したような方向でパーソンズのパターン変数理論などと関連づけることによって，ルーマン図式でも発生の問題をある程度扱えるのではないかと筆者は予感するが，これも詳しい検討はのちに譲らざるをえない。ともあれ，ルーマンの独創的かつ壮大な理論展開は，彼の業績のごく一部を垣間見たにすぎない者にも新鮮な刺激を与えてくれた。このことを記して本稿の結びとしよう。

---

17) 動機づけ危機というのは，J.ハーバーマスが経済危機，合理性危機，正統化危機とならんで晩期資本主義の危機的傾向のひとつとしてあげたもので，文化的伝統の風化が政治・経済両システムにたいして逆機能的に作用することを指している。詳しくは J. Habermas, *Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus*, Suhrkamp, 1973（細谷貞雄訳『晩期資本主義における正統化の諸問題』岩波書店，1979）参照。

18) ルーマン理論理解のために利用可能な邦語文献としては，岡田与好他編『社会科学と諸思想の展開』（創文社，1977）の中の青井秀夫氏の論文「ニクラス・ルーマンの『機能的システム理論』について」，『思想』1980年1月号・2月号の山口節郎氏の論文「科学論としての社会理論」および『思想』1981年2月号の「社会システム論特集」などがあるが，とくに青井論文は理解に資するところが大きいと思われる。

参 考 文 献

〔1〕Luhmann, N., "Soziologie als Theorie sozialer Systeme," in: *Soziologische Aufklärung* Bd. 1, Westdeutscher Verlag, 1967.

〔2〕Luhmann, N., "Wirtschaft als soziales System," in: *Soziologische Aufklärung* Bd. 1, 1970.

〔3〕Luhmann, N., *Rechtssoziologie*, 2Bde., Rowohlt, 1972.（村上淳一・六本佳平訳『法社会学』岩波書店，1977.）

〔4〕Luhmann, N., "Einführende Bemerkungen zu einer Theorie symbolisch generalisierter Kommunikationsmedien," in: *Soziologische Aufklärung* Bd. 2, Westdeutscher Verlag, 1974.

〔5〕Luhmann, N., "Generalized Media and the Problem of Contingency," in: J. J. Loubser *et al.* (eds.), *Explorations in General Theory in Social Science* Vol. 2, Free Press, 1976.

〔6〕Münch, R., *Theorie sozialer Systeme*, Westdeutscher Verlag, 1976.

〔7〕Parsons, T., R. F. Bales and E. A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, Free Press, 1953.

〔8〕Parsons, T. and N. J. Smelser, *Economy and Society*, Routledge & Kegan Paul, 1956.（富永健一訳『経済と社会』Ⅰ,Ⅱ 岩波書店，1958-9.）

〔9〕Parsons, T., *Politics and Social Structure*, Free Press, 1969.（新明正道監訳『政治と社会構造』上，下 誠信書房，1973-4.）

〔10〕Parsons, T., "Social Structure and the Symbolic Media of Interchange," in: P. M. Blau (ed.) *Approaches to the Study of Social Structure*, Free Press, 1975, reprinted in: T. Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, Free Press, 1977.